ワークショップ

教育にインプロをとりいれてみよう
-インプロを体験するワークショップ-

仙石桂子　・　Gehrtz 三隅友子
（四国学院大学）　・　（徳島大学国際センター）

1．はじめに

近年、教育や研修にインプロ（impro,impprov）＝即興劇をとりいれる機関や組織が増えている。インプロは、脚本も設定も役も決まらない中で、その場で浮かんだアイデアを参加者が受け入れあい、膨らませながら物語を作り、場面を演じながら作っていく演劇活動である。身体的コミュニケーションを使ったこの手法が、組織や個人の日常を揺さぶり、変化のきっかけを作ることが効果として脚光を浴びている。予測不可能な社会に必要な他者との関係つくり、そしてコミュニケーションの手法であるこのインプロを参加者とともに共有したい。（インプロについては次頁資料を参照のこと。）

2．なぜ教育にインプロを？

なぜ教育にインプロ導入を勧めるのかの問いに関しては以下の５つを答えとする。

① 教育の二つのねらいに適している
② ケアの概念が保たれる
③ コミュニケーションを再考できる
④ 心と身体とこえの感覚を取り戻す
⑤ 個人から全体の「学び」を体感できる

これらは、筆者らがそれぞれの立場（演劇指導／日本語教育）で実践しながら得たものである。

3．実践例-まほろば国際プロジェクト-

インプロから発展させて、演劇知を教育に導入することを 2007 年から３年間実施した。これは日本語教育のコースをプロジェクトワークとし、最終課題（パフォーマンス）を地域の日本人との演劇活動をしたものである。教室内ではインプロをはじめとする演劇的手法のタスクを取り入れた。演劇という目標のための、日本語のインプット、台詞としての言語練習、演劇練習の際の日本人との日本語でのやりとり、さらに演じるための身体的トレーニングを通して日本語と文化を学んだ。活動後の評価とフィードバックからは次を確認した。①コミュニケーションを目指す日本語教育にとっての演劇知の可能性　②演劇を通して日本人と共に学ぶことが多文化共生のきっかけとなること　③教師が広い評価の視点を持って伴走者の役割も果たせることの三点である。同様に 2014 年２月に演劇活動を実施するため、現在共通教育の「日本事情Ⅱ」と「異文化交流体験から何を学ぶか」でインプロを取り入れた授業を実施している。（引用：Gehrtz 三隅友子（2011）「地域と作る演劇と日本語教育―まほろば国際プロジェクト３年間の活動を経て―」第回日本語教育連絡会議報告発表論文集 p．159-168）

4．広く教育活動で取り入れ実践する可能性

３の例は言語教育及び異文化理解教育での実践であり、それぞれの教師の目指す目標とは異なることは言うまでもない。本ワークショップは、インプロを実際の教室活動（これまでの講義形式・共同学習形式等以外に）に何らかの形でとり入れることを提案するものである。インプロを実施することによって前述の①から⑤を教師と学習者が共有することができ、そして互いに新たな学びの関係を基に授業を展開することも可能と考える。今回はウォーミングアップの後、いくつかの活動を通して、この体験を個人そして全体での振り返りを共有することを目的とする。

参考文献

『インプロする組織-予定調和を超え、日常をゆさぶる』
高尾隆・中原淳著　三省堂　2012 年
『ドラマ教育入門』小林由利子、仙石桂子他
図書文化社　2010 年

資料：インプロヴィゼーション　とキース・ジョンストン

インプロとは？

＜英語のインプロヴィゼーション（improvisation：即興）という詞が省略されてできた言葉。俳優たちが脚本も、設定も、役も何も決まっていない中で、その場で出てきたアイデアを受け入れ合い、ふくらませながら、物語をつくり、シーンをつくっていく演劇である。＞

1．　ジョンストンについて

1933年イギリス南部のブリクサムで生まれる。11歳の時に文字や数字を記憶することが困難になり、学校に適応できなくなる。図書館での独学の後18歳でロンドンに出て、美術教師となる。赴任先の小学校で問題児の学級を担当し適応できないとされる子供たちに驚くべき能力を発見する。その後、知り合いの紹介で戯曲の執筆に関わる。劇作家グループの非生産的な議論をよそに、議論よりも実際に演じてみることを行い、これがインプロとなった。演劇学校での指導の中で授業を超えて稽古場での参加者の笑いと面白さがインプロ劇団を作るまでになる。世界各地でインプロを教えながら、活動の場をカナダへと移しカルガリー大学を経て、インプロの創始者として、開発したゲーム、エクササイズ等をもとに現在でも世界でワークショップを行っている。

2．　ジョンストンのインプロの方法論　と3．　ジョンストンの教え方の特徴

大人を「萎縮した子ども」と考え、そもそもすべての人がもっている創造性をよみがえらせることを目指す。この創造性の中で、自然発生(spontaneity)と想像(imagination)の二つのキーワードを用いる。大人になると自然発生は、社会的こころ（Social mind）によって抑制されてしまう。以下にあげる恐れが自然発生を抑えるとしている。

①失敗への恐れ　②評価への恐れ　③未来・変化への恐れ　④見られることへの恐れ

これらの抑制に対応するために、ジョンストンは「ふつうにやる・がんばらない・独創的にならない・あたりまえのことをする・賢くならない・勝とうとしない・自分を責めない・想像の責任を取らない」と言う。検閲が奥に引っ込む。

4．　ゲームの例　（さしすせそ禁止ゲーム／ワンワード／次、何をしますか？）

5．　教えるときの工夫　と　6．　学び場作り

①カリキュラム　②教師の態度　③教師と生徒の権力関係　④段階の進め方　⑤逆の教え方

7　ジョンストンの本

・Impro: Impovisation and the Theatre(1979)　　・ Impro for Storytellers (1999)

＜まとめ＞ インプロとは

主目的：　人がもともともっている創造性や表現力を引き出す

理論の特徴：　自由な創造性や表現力を検閲する恐怖をなくしていく

方法論の特徴：　ゲームを中心として、ストレスのない学びの空間で学ぶ

『ドラマ教育入門＜キース・ジョンストン＞』高尾隆著　76-86頁を発表者らがまとめて引用